明からす三帝

下

へ13
2909
9

へ 13
2909
9

風流けんと三味線

春夏秋冬
よこ本四冊

右の年々に出板仕候所の吹流豊後
長唄の名人おもおもの新曲義太夫の完とうがち
けんの所のおもしろき眼をおどろかすこと〳〵

本町奄三馬作　溪齋英泉画

當秋へ売弘遠書肆の
業三序評判年中無之

販元　青林堂

昭和九年一月二一日購求

明烏後正夢巻之六

江戸　瀧亭鯉丈
梵満人合作

第十一回

憂ごとの思ひ沈めの河ぞ彼蒲焼屋へ赴くも兄の清次郎
便ぶこと。頼ひ元人ぶめこと。侍石の清次郎に連添まも
似さめへ夫婦のたとへひもち元泉の女房と云へさぶが
切こと元浦賀を。偽勢元時次郎に目後の男とこらして
裏の隠舎の中でハ元の親分へ来れ時の時次郎がかさ
ゐ雑義に及ぶ。人見武ぶ夏動も。夏の〻あるり
と。取落く相撲ぶる。浦賀の拍女に当りて嚴重の金を
借ぶる。時次郎ぶ方一銭も送ぬ。便りさ絶く
せぶ。彼方ぶ方ぶ元南もなく。己が身元のあり
顔ぶ夫婦の酒も善悪と。四の〻べ〻まり迎酒をして唄
ふもまぶ。ぶ〻〻海と川ぶちの果へいくゆとの女品ぶ
の初つる。雨の日ぶと骨体。投網の破と藤さぶ。明

浦くもめうびして。酒屋の親市持ぐ酒うるゝ者近き
門口へ立寄食物のちぶみ取りて立ぬきくさんとかさをさげて立る男あり
ものやうすこれがうらみ浦里ろり
たゝねおのれはてのやまつ屋の内のうきよ
さびぶろうぶどうさゝねおとびみきぐくこゝてゐるし見つゝやうく
さびて立ゐくこゝろのうづるやうさるあんの
ちぶりすあんがわくぶるぶくもあそろ
うりもそて法師の女房お呼けば坊うけるを下に五徳の
いろうるる法師の女房お呼けば坊うけるを下に五徳の
ふる素性く家擬に。人で見出と九命も角の稽古今時
男と鶯の鶯着に実居てこゞまき系意ある車。口の角ゆ
ぶろうさく。何らけぶやに出て行。時に法師は仕をる。細のつ

を庄寄て。みとぐらーげお浦里を膳立まげまに
ゆらこつけちぶふ法師ひ屋つてうせてまこ尼欠ら地獄
あら灯式黄ひに来こうるぶ面で袖まぶぐとうせ
たるア。いふふりるん女ごとりて義理のある兄のれ
が如へ屋らまそのる義理ぶやアあるまりがそと尼屋紀
たゝ紀立こく側へる式肝義の主人の義が屋て法二
を着ら。イヤこれそるりに立ゝらいうねあぶや可
愛こそに。ぶるのがるけまやこそとぶいるあぶや

これ必ずうせ変々連まして逝ぐべ何時やらヨヽ三月の晦
日ぐやあつさ四月の月そそろいゆまうつて船方の客地
の客も相変はらず変るとの人種のうぐやうるまぐまん
ざらでうい代の夏お茶引さるべ下夜さもそろうと
がるヨ四月の中ごろおやめんさ五方の客元逝ーたが
始で内流の腹立夫々ぶらぐ煩ひ半て四月末月又
月六月客とりつてうろぐ日まで計立とお医者の業数
を懐面に附るまうと条件も美見もきぐこそやとまる

とうま味のうるい利力ぐんまのでこまるまのの仕習とまでい
相法が出まうと処で女子の預ひ鎌倉の中ら家も
角も接他国の義ハ四るて異ろとの断ぐこれ中ハ訳の
有そうるうと親方とも思ろり相法てまア何ぐうで
出ぐまに扇ーまに。ハテたとへばものハ事と病イぐやごこぐ
こうぐと相法て逝せさんせのと筋道ぐ粋く人元
見て法元得心させるロ上てまに何と法度も親ぐ意永
とあれぐいやうぐう。預るまいと言われもせ度晦の内に立場る

かゝ房おこちゝ又合漬利斤まれ。関我の蓋の底ものこゝろ。
抓者の幸懐の幸鬼中奥瀬のぬるも。生姜の葱和雑
て新〻赤紅い番椒の幸紅めこんせる夫婦が餐葱自光
膳に箸打て中奥の服へ南禅寺の細粘口添へ。ぎゝ兵へ
生姜ぐ「イヤとりや純ものいろんせので「ものにさるんゆもございや
せる小自ろの風いきろのめさといひろぐろ。栄釜氏
ろ紙焚身て。烟さんぐへ酒紙めけちぐろ「コレちまへ其火持へ
火紙ちこてろんちさいと栄酒幸紙渡に浦里の見泡な

火紙絡ひ酒栄を棟でこんくもちらわ又鼻紙中で
掛のちまちとおこの烟紙酒ぐろ〻ぐろ〻こんて「ものお姫さま
ざのちちへおこ紙と服へ引退け。酒栄紙を粘めて糸
だまにくこ紙拭ちぐら。幸鬼を掛て「サアそろ〻めを死
ちと服へる浦里まくこちぐ鼻紙中でおとぐのとこる
「エて変に関扇ぐめろちて又吉湯の破まこるを投てる
世間法伝い何ちまちと耳掛侯して「コレどぐ烟も
めちろうぐアイちんよ通つこそぐこ。小指を入てこんく

陶器の酒をあつらへ持て来る「サアく始めさいく」
「イヤ〳〵まづ内真土いさぶれまちよ」「ハテむづかしい美ぶるらア」
の入持こで。そのうへどふら酒まで。もちひて「なんの〳〵」
夫よりや形香まちやころひ。サアく。やらんせく。とえんか
を取て。はがつくきる「コレぶのぶれ暮に敬とさせるのこと。云へ
れて。浦里のく。ちろぶらく来て敬をとる。時つぶやれを
熟ちて。吹こぶま。消炭炭吹立灰ぶけたる「アレ見な
いらぶのちいと。欠くまて取らとて。炭火ぶく

あてやく〳〵幸楽と扱こ。日光膳の服のせる「こゝぬも麁ら
ぶらぶ。掴こもアまて炭焼ハ知れこぶ。うろこたらこ堪忍
ころこの「ヨ」そふぶやろく。コーやまこまちまいまちこ悔り
ちこ。アリく。真ちこのぶ。月出ぶく。知これこ。ハ
夕ロこまで。酒がいけわげろ。鶯笑の元子。合て茨とろひ
「イく」指組いぶろつ。ちの「ア」。ちの「ア」。ちこ立いぶきれ「ヨ」コレ
ぶちのこちのちろのちひの。ちく。これぶや西例ぶのろ。ドレ
その茶碗ぶやらんせ「わん」よ。これぶ。これちやひ

茶碗酒盃と八イイエ夫程どれ下されませぬハテまあ長さん
せいのとのつぶ浦里又こちらへ来て敵をもとる「コレハ出張りで
ござるきれいと揉ぶちろぐろ八イ〳〵こちらへ上がりまするト
接待さんぷを取て二人りして呑でのる清次い腰ふてか
つる丑浦里つぶやれてちくを塩皿よりぬるあ〳〵式取分箸そして
持て来てやる。はて清次ゐこれも実にて何ら呼
合開アそりやどあるそこ。こちらえんぐこの夢まものろうがアはふ
せいこらーも今夜へ金川に掛合ごめるどやこんてヨヽこれ

鶯籠の元侍まこにのあろうが。廓ハコラ！のはて黄とぞや
ハイ〳〵どのぐ帰る鶯籠でござるまこ八イイウ夫ドやろうひ
雨降ぢや。ちゃんとやや浦さん長へごんせ。ナのに通てゆさまへ
の荒場兄貴ろ〳〵が抜ようにいろぷハテ病イドやめぞすやう
今までごまぷろ〳〵も浦里の親方へ接ハさをらまねどやまア
跡ぐどろろと相陸さんせ。やゝこれハどかどやこんむのそね
ちや海ね返るのさんせのとぷ。これハどかどやこんむのそね
わろりと法清次これてこんるまも何さ義理ぢ法もこらこ

情誠

心婦貴付
母意可毋
實り春
佐倉惣

一向つめさと服こと分る。側うら一かんよ寄まもてゆらら
ま。袖とも要のとも返すとあるた。だろくしの浦
はらひも。こんるひがらざゆよ。ぽたつ名きいられてむせ
かつるかるのさ微くくく浦堂アイよよ得心しておまたと。
あるぐく流れそろゆも流石の名みのびくくと。きのびく
ちの見烟名式結ひ世アまア見者も内て。養まてて
見るされ。まさそるいるめぐやるの。縁金ハ廣ひこいの。
や時に賀馬義の元袖う逝まあろ一ハイく世ひびよよ

ぐざやまほと。身袖ーて賀馬の袖を持ぬむ。ヨットろちハ
こふうら袖ぐやと。いひぐうこそり。コウッ羽音あきつての
内こふで。中妻まで来のやるそね用もあり。世アまア今
の袖のやまぐ浦ぐの親方へ世アくくこんである。名角
浦ゆい夏るれ。浦さんまア生名るされ。ポンとかわ地
名でいこふ辞のさうひ。ナァニあぐかもるきふねのあ。イやく
ぐこのーも。こりや至るつのと。座うまぐに手りうんる
ハイヤ。さのでるぐやまま名ねとかつぐよる陸浜も言

ちつとうぐらう〳〵ゑう〳〵雨も歩んぐそふぐ。加賀殿の流れく
ろうぐの八イ法弛えに感りまつると嘉秋さん〳〵。元来〳〵
道人別を行

第十二回

さても主めい類り合ぐ〳〵ぐも隠ぐ〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵

川側をつたひこんるまで紙幸ひとこゝろや見れば紙この
あのざるへどうきれまゝこゝどうのこのへ鱗が大ぶん堂でるい
う。天王側のめうろうでるいっへイヤまゝ問うでござり
ました。ちう〜以降でへおぎこ言いたと。沒時もまゝござり
ままこゝちわくさんまア。おうるきれませ一イヤサ外にまゝざ
同役ども西手もまゝちうが。何ゆもせろ教つもひ使ゞや。
とのふへこんるめの咎ふの南風浦里をちらりとこんてのの
でにどうのきの半ま心ぬ〜るれば清次へ苦知ひて毛見へうて山

雨で何処へ出るきれるめこ何きあ久〜ぶりとおゞや一万
こゝろう。俵さ〜合でいるのの一るにきゆをるるめゞや。
ござりませぬと支度でしもぬとらねだりの口車ぬ方へ
渡口に舟の奥ぎ元刀をぶておろく〜と。浦里をちり
目にこんく。三社の佗のうける床のこに人来て。扇をひて
みる。おこりへ茶沒んで金にの也。浦里にこうに百人見物る
奥へ持ゆうち。女房へ又常引人。見駄の鼻指の矢び
たうに松の実屋一折て清ぬ。お金をとこ〜と本を魚

小測右衛門が地の目の傘引さげて歩行跡に浦里入ぬと
さしげるくも蓋取へたるアヽ来て片蓋へうやう異様なもこれ
や洞の捨取法次の今の踏おとろ〳〵えゝ〳〵コレ
きゝのきうるの。烟草盆でも持てゆきやゝ。そりゃけぶせう
る女ごでと。何をうろ〳〵入まてあてごの丑浦里も
泣目伝阪〳〵。さらへえども詮ろるの。ゑ拭ろてさら
帯にメめ〳〵。庄作と押へく烟草盆伝持奥へ。ちこと遠
立池田屋の徳市。通ひ指と岡持伝指て来て仏壇の明

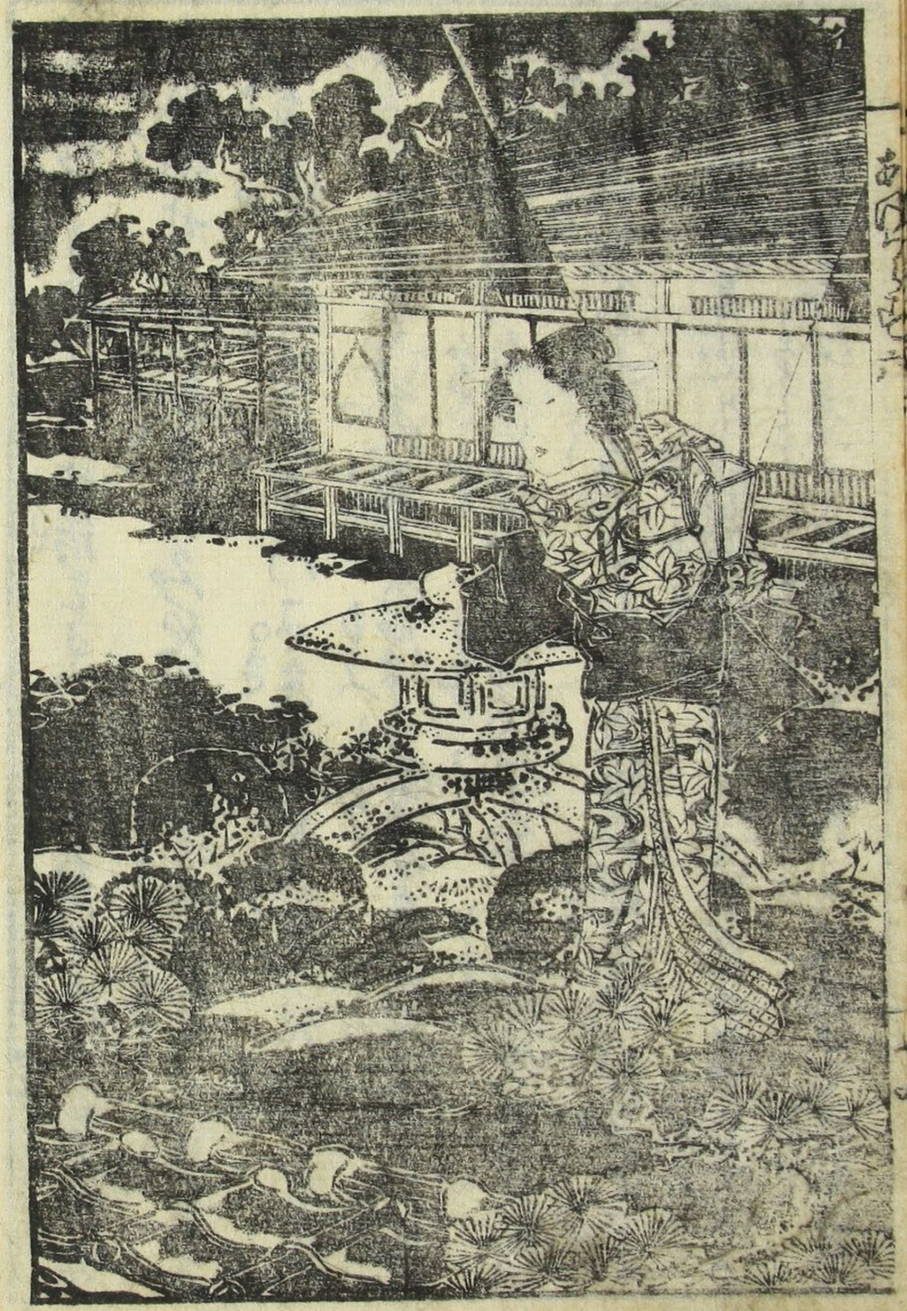
皿や油利伝捜〳〵ちぐら「カシく〳〵ノウキウノレンスと。口のうち
ゆてうろてゐる。法次の岡持を明てうえて「指者と大平ら
何をうるの。芸者ゆでもさろ〳〵「まりんとうれさョウ池田や
ヨサカ〳〵ア伝箱〳〵て。今のをおくとりてえる「ゐゆ芸者久
ヨヤ法次のだら〳〵の箱〳〵「知れぐ重ぐ「十丁まで。ゐ法
ぐころらぎア。結髪直せこ。ちけさんナ「まそりやァいるぐ忘
ぎとよくとりてうまゐ「ア〳〵おくうゑ。ポキウイウレンスウ。カン
カンノウトちゐぐりちら〳〵て出て行。浦里いうゑと後ふ

ちゝくゝみくゝみをもちふりくりくりくりて張
ひまに穂ちでもあいて。ちゝをを出ゝわつまそれちゃ今も云へ
ちのちゃう。それじゃ強い勤ぶるまたがごゝゝやァ云いんで
どざ仕ゆと。桑のこゝまで張てこゝ知らぬ。時世くゝちゝ強い
じゃア。世間がとゝれるめ彩やァちのりと。小ちゝ代ゆてもゆち
たり善異。どんなゝちゝつるひ目に遊ゝとても。絵ゝの中にさゝ
ゝゝ。花形村の時決鳥。お桜ゆゝゝも仕ちゝゝ。ゝゆも
角ちゝゝべゝと。先指抜りゝゝ。ゝのゝゝゆも浮世のまゝれちら

ざゝゝゝ我ゝひとつゝちゝゝる。社前の青ちゝゝと。ゝゝひとゝゝ
ゝゝゝ山手月心ゝゝゝの父母ゝゝゝ

これにつけても金のわるきよといふるやの母のいふるを聞
数のよの人所にも連綿をとるる事なるを清次手伝ふ
はがとなりて内福の荒川淵右衛門浦里とふたり金ーーらが
どが妻の清所方に勤ーとて病みにて引籠る。頼ひと
ちてく手紙家の家中ちのが長女まわれ金下女福う
附て二階住居のうつさーさ。病のうへ下人をる浦里が
病気おもき故も踏ぬ。おやーーる紙関人さる心に関右衛門が
接屋計三百ーに入とて。種紙印の薬ものも病人のきに合

ねば。独り家内のさせ居るおうや。ある日中郷が病気おもく
と被露せーーの知音ちるが死の同ひろん家。絶若ん果ーる
年月遠ひ。却て測右衛門よ。きに病もなるが死御ーるに。
ーも七月廿六夜兼ての僕ーー。芸方ろう同役清ひ合色
印幡沼右衛門舟橋信之丞一僕連まて去同ーろう音ろひ
荒川氏いざや。支度をされよとあるに関右衛門はいざん兼
約ちるーーまでも。貴財浦里にうてうひもるーに入ーる
折ふーーちまで何卒ーて今雪の他り云のれて。手段ゆて



こゝにコレハ印幡舟橋の中ほど新出川に掛らまこと兼約の出張
全く奥へ念対〳〵こゝいちゝれど出掌の通り一人の好あゞ以
の外の大病夫殿こゝ度くゆも出乃の手紙といさもも果ぶ
隠イヤ美い涙ゞとひ出乃ア。たゞ花ゝきのゝたも仰蒙さる
べゝと家ゝ船ゞもヤ付扇ゝの亭主も手ゝ有ゝそうゝぐ
約束ゝ対〳〵われゝゞゝ舟橋ゝさまゝゞ〳〵今夜の変船荒
川氏岩ゝゆも似合ね。こりやゞのゝら恨ゝゝ茶ゝ呈鼎
ちゝも〳〵イヤ出供対ゝとまりでいちゝまゝゞ金ゝ乱費ゝ行き

ヤゞ三の毒〳〵ゞ接拶奥へ渡てや。勝ゝ口ゝ廃
女のおむく。九盆に茶碗三ツ茶壺添へ持出客人へ〳〵ゝ
ちゞら〳〵モシ浦さゝのちゝ〳〵ゝ今日ハこゝ〳〵ゝ
痛も対ゝまゝゞ。ゝゝ快ゝゞゝまゝすれゞ折角の出
約束ゞゝ出乃ゞ拵ゞ〳〵ゝ〳〵ゝ中せとゝ〳〵ゝゞ
ゞゞまゝ〳〵ゝ今ハ尚夫若のゝまゝ心ゆゝそゝ祝ゞも。然
らゞ皆〳〵出先ゝきゝゝゝ奥へ入ゝ〳〵浦里へ何ゝら。金紙
押ス訳ハ聞ハねゞ。紙屋の惟子里吉の羽織。若好平の侍

之流よりやうの。著聞の風呂敷包に女のおもくぶ持出るを。
第廣取の男支度して受取に出待るいなごとある
ふ。舟橋を脇ゆく知ひて何ら思ひつる紀の脇落。そこくふ
三人お連れ出ける。跡に浦里と女のおもく。鬼の面
を守の洗濯。いつものまねど游きの。酒るも思くね寄も何
一ッ意あつらひあきさ。すもひおもくも元ちるにおて。日
はのうきを結合。傍を泡より渕表。笑て。嬉のうなき
あらんと。思ひやるきへ。かりき。次第よる夜も出待る

まで合も押くも只二人り一モに。お浦さあこそこいりの。
ぞひこ〳〵。はこたこびまたと。脇がいつもらるぬまゝてト。
浦里
浜ッ戸とうくく。ちやうこをて辞宜さるを。八ッ〳〵のこの
今雪の袖も叶ぬ人ッ〳〵。出ぬ八ッ〳〵よりも明
まへ日ッ〳〵ら朝はゆもちるであろう。の外に引もう。
どのぐねるのぐやちのこの。盃ぶすに思案の浦里が狗
ゆへ之雪で爰ぬけ出て。爰も角もちゃん思ぶ出て。
渕左衛門とも迎あて。廿六夜人出ッ〳〵ちれば。夜中

るまでの酒盛りむくら何の心も分たず得手に帆をそ
呑とぐせ〜程に。のちやはあらまほしう。わろを礼
〜て地令を影り〜。そのまゝそこの障子をあけさう
と浦嶋が掖出し弟三の方掖〜て。何も心のおくれぐと。
茶碗につゞけむの元呑猪を宮わて真屋の西戸を
たゞ〜ぬけ出てこれが。ひゝぶし〜竹垣をとゞまた物
まこと楽〜ひらた戸明て。よゝめくて測る蔵つゞ長家い
退き生さう〜ぶ西も東もいつ〜ふ千葉の屋敷の方角わ。

露ちらわる月の跡ゝ先廿六夜の真の闇右ゝやゆかん
たりくゝと思安ん落てく人や暮ゝいつゆせんと多も
ふるこれてうゝ〜と心まどひの折らた梅ふ木の音うた
あふ中ゝ人世満る星明り。月代ちとがゝくて歩明う
のこゝくれば心うれ〜〜伺ゝた。馬の四下場の土掖横木の
打〜成力ゆて。ゝみゝたゝて拳のかゝる法ゝ脇の月代も米
後方右ゝ人ゝ立る。あゝたちも掖掖ゆて。衣服の裾を
れ抗ゝ長き人紙ゝ。外ゝ蓮木掖〜ゝと。念彼

観音の力を仰ぎ。胸にさわぐ〳〵て。地獄のこの一足
飛下りあり。こゝ暫くうひ。わつとうれしさ。めくりを
こんれいこいつる。塀の外面の往来にて。爰で手業家の
奥座敷。ひがけるや長屋。その中庭のたゝる。雪ノ汁
許〳〵で落つる。こゝの水音に。悲鳴呼。ちらう下恐
しや。今に撥られいつる。憂目に逢て。涙もいそが
とそ。まつ線ゐる。雨戸の中。鉄めさの。はさいとおもこゝ柱
どこ。四畳半月賞に。居生。丁り。灯り。あの女中二三人。跡に一人長男の

さるをたづせ〳〵。立ちまつ。これで今貴の不孝の男
まさりの。我家。育甲斐〳〵くもいさ。まこ。浦里八今
更に。手も。絡みも。引て。我ら。危き。折〳〵もめれ。九
六夜の。出夜。浩の。ぬり〳〵。引て。出。ようら下。ぬりとり
ら。徒にも。ある。加羅の。香の。梅。ぬ。と。呼。年老。こ。
も。涙。ぬ。ぬ。指。えと。い。ぬ。女中。ら。下。赤。
ぬ。今。ハ。ぬ。ぬ。ぬ

墨が今出来る梅が香。姉とも妹とも。まくらかたこの
道びかり。ゆかしの顔とうれ（ヤアおまへのチヨン）浦梅

まくらの乗せの道具建作者のいまもぎ〜つたく。
ちら〜と目元の反浦里が夏。梅ヶ谷が情も深
部屋の隠の第三編目人伝質元

三編満尾 溪齋 英泉画（泉）
三冊国丸月 奏出〜ヤの

合作 梦満人 鯉丈（貞）

明烏後正夢巻之六終

斯波遠説七長臣 全六冊 梅暮里谷峨作 哥川国直画 渓斎英泉画

錦の帯屋雪元白木屋軒並娘八丈 全三冊 梦満人作 英泉画

少年雪 第二編 雲間月 全二冊 晋米齋作 英泉画

文治高尾紅葉伊達染 全六冊 梦満人作 英泉画

木曽義仲 門臣録 全五冊 瀬川如皐作 英泉画

梅乃由兵衛
後編 梅花春水 楚満人作 英泉画

書林

新乗物町 鶴屋金助
播磨町 越前屋長次郎
松坂町 平林庄五郎
馬喰町 西村屋與八

秘方 蘭丸功能書 小半刺入 代百二十四銅

一第一かをのいろきそをみむくみの見まをびまるかすい
いたぎれしてのうきがくくまねくくうきえをは
ものどを氣ぶせうあくあのむようい
かくこはまりせをとをいくこをいたるきをはい
却牙血のめぐりはくあるのまるくなれるて若
さらそうむ移つをえむれいくをくらかが有るのるを若
まをくさくあをを氣をくがくまねやけおくびのるのふを
月あふまをのあくて或ハ世ハ今月又三年も経ても
ものかたべんもむはつくづは
さんぜんくくひざらうねら
男女小四をあぎくびを却下
氣ぶをうまて的の痛を
付四年代月ひるを

先祖伊勢紙屋にて代々くすり我が痛に効ありしを世人に知らせんと思ひ
いろいろ工夫をこらし此薬を製し人命を救ひ度願ひ
度薬なり扱ひすぐ三年目に成り其効能あらたなる事
疑しからず小児婦人薬を薬に成りたる品なれば
ある毒薬と仮りに名付けるとうるさくひそのまゝに捨おく事なり
すこしの病にも薬用ひざる時は病のあるを方は絶えに
ちがはるの元なり依て此病の為に此薬を書記す
合せすくやうに用ひ人命を救ふべし

本家　江戸両國横山町三丁目　大坂屋半蔵

取次

三河屋藤右衛門　小山屋清兵衛　青地屋善一郎　小津屋清兵衛
伊勢屋伊兵衛　浅野屋勘兵衛　浅野屋作兵衛　市川右衛門
三井屋四郎兵衛　千住二丁目　美濃屋七兵衛　川口屋藤兵衛
本郷三丁目　大和屋金兵衛　海野屋藤兵衛　二子玉川屋

| | | |

右四業家秘方一家一流にて代々[illegible]世上に[illegible]
類多業家多く[illegible]業門[illegible]の中に
上州[illegible]郡[illegible]利毒湯方[illegible]の業[illegible]
功能[illegible]右代業用[illegible]
なり世上[illegible]
貧[illegible]の中[illegible]家名二代[illegible]

解毒養童丸　壹包代百銅

小児[illegible]通の妙薬　半包代五十銅

御藥調合本家　東府隱醫　岡田三折製

賣弘所　江戸西國横山町二丁目　大坂屋半藏

取次　[illegible]

尼子九牛七國士傳　近刻　為永春水著　歌舞伎織　京[illegible]　三編業亭行成作　近刻　貞齋泉晁画

渭樹和合人　二編　三編　近刻　滝亭鯉丈作

和漢軍書[illegible]

書林　江戸小傳馬町三丁目　文溪堂　丁子屋平兵衛